

〈その他〉第22回「人間環境学特別セミナー： とにかく考えてみよう（トニカン）」トーク ショー「チェルノブイリ、福島、ウクライナの 現在：菅谷昭先生をお迎えして」報告

吉永, 明弘 / Yoshinaga, Akihiro

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei Journal of Sustainability Studies / 人間環境論集

(巻 / Volume)

23

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2022-10-31

第 22 回「人間環境学特別セミナー： とにかく考えてみよう（トニカン）」 トークショー「チェルノブイリ、福島、ウクライ ナの現在：菅谷昭先生をお迎えして」報告

吉永 明弘

法政大学人間環境学部では、2011 年の東日本大震災以来、教職員と学生の共同企画として、「法政大学・人間環境学特別セミナー：ドキュメンタリー映画を見て、震災後の日本社会を考える（通称「トニカン」）」という催しを続けている。エネルギー問題について、地域社会のあり方について、持続可能な社会の可能性について、ともに議論しようという催しである。通常は、ドキュメンタリー映画を見たあとでゲストとともに議論するというスタイルをとっているが、今回（2022 年 7 月 2 日）は、松本大学学長の菅谷昭氏をお招きして、菅谷氏に学部教員の吉永明弘と金光秀和がお話をうかがうという形で実施した。なお、新型コロナウイルスの感染再拡大の懸念があったため、学生・教員には対面での参加、外部の方にはオンラインでの参加を求めた。結果的に対面で約 40 人、オンラインで約 35 人の参加があった。

以下、当日の内容を報告する。菅谷氏の講演については要約を記し、トークショーについては録音の書き起こしを掲載する。

第1部 菅谷昭先生講演「スラブ族の人々と関わって：ベラルーシでの医療支援活動、そしてロシアのウクライナ軍事侵攻」(要約)

今日はベラルーシでの医療支援活動について話すとともに、現在起こっているウクライナ侵攻について、5年半にわたりスラブ族の人々と関わった経験をふまえ、地理的・歴史的な視点を交えて私自身の考えを述べたいと思う。

(1) スラブ族について

スラブとは、インド・ヨーロッパ語族の中のスラブ語を使う民族の総称である。東スラブ族、西スラブ族、南スラブ族に分かれ、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人は、東スラブ族に属する。この三つは兄弟ということができ、面積においても人口においても、ロシアが長男、ウクライナが次男、ベラルーシが三男にたとえられる。1917年のロシア革命でソビエト連邦が成立してからは70年くらい同じ国の国民として一緒にやってきた。1991年にソビエト連邦が崩壊して別々の共和国になった。ただし今もロシアには旧ソ連の枠組みに戻りたいと思っている人たちが多くいる。だからプーチンに対する支持率が高くなる。

また歴史的には、スラブ主義というものがある。スラブ主義とは、19世紀中頃のロシアに興った民族主義的社会思想を指す。西欧主義に反対し、ロシアにミール（農村共同体）を基盤とする独自の発展の道があると訴えた。この背景には、当時、西欧の人々が、スラブ族の後進性を指摘し、西欧のやり方を取り入れるべきだと主張したことがある。それに対してロシアの人々は対抗心、敵対心を抱いたのである。こうしたことを、今回の軍事侵攻を考えるうえで知っておくべきである。

私がベラルーシに滞在した時期には、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの人たちの間に対立はなかった。そのころ、東スラブ族のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人の性格の違いについて聞いたところ、ベラルーシ人の友人医師がこんな話をしてくれた。

「ある会議の折、座っている椅子のお尻の部分に釘の頭が出ていたため、しばらくすると、その部分が痛くなってきた。そのような時、ロシア人ならば、すごい形相をして、力まかせにその釘を手で引き抜いてしまうだろう。ウクライナ人ならば、金槌を借りて釘を抜いたあと、曲がっている部分をまっすぐにし、あとでその釘を売るだろう。ベラルーシ人ならば、痛くても会議が終了するまで、じっと我慢しているだろう」

確かに現在ロシアは強引に、力任せにやっているし、ウクライナは大統領がメディアを上手に使っている。

ここで、私がロシア軍事侵攻直前に感じたことを申し上げたい。ウクライナへの侵攻を開始する直前のテレビ画面を通して見たプーチン大統領の尋常とは思えない顔つきや目つき、話しぶりから以下のことを直感した。表向きはもっともらしさを装った侵攻の理由（ウクライナにいる親ロシア派を守るため）をまくしたてているが、彼は本心（腹のうち）では、ロシアを軸とする東スラブ族を統一し、かつての大国の再興（専制主義国家体制の再構築）を狙っているのではないか。プーチンは、ウクライナという次男をヨーロッパに奪われたくないのだろう。軍事同盟である NATO の東方拡大によって、ウクライナにロシアが攻められることを彼は恐れているようだ。

2022年6月15日の信濃毎日新聞に、ウクライナの国際政治学者グレンコ・アンドリー氏のインタビューが載っていた。そこにはプーチンの目標が「ウクライナを支配し、同盟国ベラルーシを加えた「スラブ連合」を興す」ことだと書いてある。これを読んで私は意を強くした。

軍事侵攻は決して許されないことであるが、西側諸国の対応についても一考を要する。一つ間違えれば、「窮鼠猫をかむ」ということもありうる。西側は武器を送るのではなく、外交によって停戦にもっていく道を探るべきである。その停戦への仲介をとるのは日本である。日本は原爆を投下され、原発事故も経験した。平和の大切さを一番言える立場である。アメリカに追従するだけではなく、停戦に向けた外交的努力をすべきである。

(2) チェルノブイリについて — 1991 年の訪問

チェルノブイリ原発はベラルーシとウクライナの国境線沿いに存在する。この原発が1986年4月26日に爆発し、広島型原爆の500倍から600倍の放射性物質が放出され、北半球全体が汚染された。程度は低いが、日本も汚染されたといえる。特にひどく汚染されたのは、ウクライナ、ベラルーシ、そしてロシアの西側である。また季節風によって北欧まで放射性物質が運ばれた。モスクワは風向きとの関係で汚染されなかったが、それは幸運だったにすぎない。

汚染地帯はチェルノブイリ原発から300キロメートルの範囲まで広がっている。30キロメートル以内の地域は高度に汚染されているため居住禁止区域になっているが、同じくらいの汚染が離れた地域にも局所的に存在する。これをホットスポットという。それは吹き上げられた放射性物質が雨や雪によって降下することによって生じる。

私は1991年3月に初めて原発を訪れた。許可を得てベラルーシ側の30キロゾーン検問所から入っていった。森林地帯が広がり、それが全部汚染されている。30キロゾーンの中の村は廃村になっている。家の中も高度に汚染されたので、放射性物質が空中に飛散しないように、家をつぶして埋めたという。今回、ウクライナに戦車が侵攻していったが、その際にこの30キロゾーンを通って行った。そのときの砂ほこりによって、このあたりの空間線量が高くなった。事故から36年経っても放射性物質が残っているのである。そのため今でも30キロゾーンには人が住んではいけないことになっている。

チェルノブイリ原発事故ではメルトダウンが起こり、火事になった。放射性物質が大量に吹き上げられたので、何とかしなければならぬが、普通の消火作業では消えないので、ヘリコプターで上から鉛をまき、そのあとコンクリートで固めた。それを「石棺」という。その後、石棺は経年劣化して、ひび割れから放射性物質が空中に出てきている。それを防ぐためにドームでカバーをし、シェルターをつくることにした。2年ほど前にシェルターは完成した（第二石棺）が、寿命は100年と言われている。このシェルターにひび割れが起こり、放射性物質が漏れることになったら、第三の石棺を作らなければならない。この作業に終わ

りはない。福島第一原発もこうした状況になる可能性がある。

ウクライナ南部にあるザポロジエ原発は、ヨーロッパでも最大レベルの原発である。ここをロシアがミサイル攻撃するという話があったが、私はしないだろうと思った。ここをミサイルで攻撃したら放射性物質がモスクワに到達する可能性があるからだ。ただ誤爆によって原発に当たることもあるので、ミサイル攻撃自体をやめるべきである。

(3) チェルノブイリについて — 2016年の訪問

2016年、チェルノブイリ原発事故から30年が経過した節目の年にベラルーシを訪れた。

ホットスポットのゴメリ州ベトカ地区（居住禁止区域）に行くと、相変わらず「進入禁止」（高度放射能汚染区域につき立ち入り禁止）の表示があった。許可をとって中に入ると、村へ続く道路沿いの草木は手入れもされず伸び放題である。道路脇の空間放射線量は、0.4マイクロシーベルト／時だった。道路の外には田畑があるが、そこはもっと高線量である。除染してもしきれないのである。

道路脇に家があり、4年前に訪れたときには老夫婦が住んでいた。本当は住んではいけないのだが、墓を守りたい、ふるさとに住みたいといった理由で黙認されていた。その老夫婦は亡くなり、家の中は荒れ放題になっていた。家の中のほうが線量が高いため、この家はつぶされるとのことだ。

その際、「チェルノブイリの子どもたちを救う会」を訪問した。チェルノブイリ原発事故による子どもたちの健康被害などの実態調査や支援活動を継続しているボランティアの会である。そこで、地区病院の院長の男性医師がこんなことを言っていた。

「ベラルーシでは汚染地の子どもたちに毎年1か月程度の健康保養を、国の責任として無料で実施しています。日本ではなぜそのような国家的プロジェクトを実施していないのか」

ベラルーシは経済的に厳しいにもかかわらず、国は子どもを守っている。日本

はお金があるのにどうしてやらないのか、という言葉に、私は何も言えなかった。

次に、ゴメリ州立保健局を訪問した。局長のワシリコフ医師と面会し、ゴメリ州住民の健康状況の現状について意見交換を行った。懇談の終わりに、局長は「国家は人々に対して背を向けてはいけません」ときっぱり言った。

私は日本が原発をやるかやらないかについては、公人としては（市長時）、中立的な立場だが、やるのであれば、事故を起こしたときには国が被災者を全面的にケアするべきだと思う。水俣病でもそうだが、日本は後で裁判になってはじめて補償をする。人々のケアが保証されていないのに原発再稼働を言っているのは残念なことだ。

チェルノブイリ原発事故後の健康被害についてまとめる。低濃度汚染地帯は住んでもよいということになって、現状ではそこに住まざるをえない。そこに住んでいる子どもたちは、免疫機能が低下している。チェルノブイリ・エイズともいわれるように、非常に感染しやすくなっている。また、造血器障害（貧血など）も見られるし、周産期異常（未熟児、早産、死産、先天性異常など）もある。その他の健康影響として、易疲労性、集中力欠如、体力低下など、またセシウムの体内蓄積もある。今このような状況にある子どもたちは、事故が起きて10年後に生まれた子どもたちである。彼らは、低濃度汚染地帯に住んでいて、常に低線量被ばくを受けている。福島でもこのようなことが起こる可能性は否定できない。

チェルノブイリ事故による被災地で生活する子どもたちの苦痛とは、原子力災害による「子どもたちの生きる権利（生存権）」への侵害に伴う肉体的・精神的な痛みや苦しみであり、「子どもたちへの虐待」に通じるものである。

(4) 福島第一原発事故について

ベラルーシから日本に帰ってきて2年後の2003年に、東京大学大学院の人工環境学講座の先生から講演を依頼された。この人は原子力工学の先生である。依頼の手紙の中に、次のような言葉があった。

「工学や科学技術は、光の部分だけでなく、その誤った使い方や、モラルに外れる行為により、とくに弱者に対して取り返しのつかない災禍をもたらすものである」

この時の講演で、私は日本でも原発事故は起こりうるということを申しあげた。この先生は2011年の福島第一原発事故のあとに東大を辞めてアメリカに渡った。原発を廃炉にするには原子力工学の知識が不可欠である。おそらくこの先生はアメリカで廃炉の研究をしているのではないかと思う。

村上春樹氏のインタビューが、2015年4月21日の信濃毎日新聞に掲載された。

「15万人もの人が避難を余儀なくされています。長いあいだ住んでいた土地から突然立ち退かされるというのは、人間の魂が部分的に殺されるのと同じです。そういう人が15万人も生まれてしまったというのは、国家のあり方の根幹にかかわることです。経済効率のよしあしでは済まされない問題です。それが何ひとつ解決していないのに、構造的なリスクを抱えたまま原発を再稼働させるというのは、国家のモラルからしても論外だと思う」

こういう知識人が声をあげることは重要である。倉本聰氏は2014年12月26日のインタビュー（「倉本聰・福島のありのままを伝えたい——原発事故が風化の様相を呈している」PHPオンライン衆知 <https://shuchi.php.co.jp/article/2150?p=1>）のなかでもっと厳しいことを言っている。

「メルトダウンの始末もつかず、核燃料廃棄物の処理の方策が見つからないまま、原発再稼働へ舵を切り、原発輸出さえ進めようとしている。被災者の思いを汲み取れば、オリンピックを東京で開催するのは非常識だと思えますね」

「本来、風化とは岩が何千年、何万年、何億年かかって塵となり飛散することをいいます。それがわずか数年前の原発事故がこんなにも脆く、早くも風化の様相を呈していることに激しい憤りを感じます。1億総認知症ってい

いたいですよ」

私は認知症ではなく、「悪性反復性健忘症」と呼んでいた。そしてどうか福島の場合だけは、この病気を治してほしいと思っていたが、治らずに風化が進んでいる。それで今は「難治性悪性反復性健忘症」と呼んでいる。

もう一つ大きな問題は、放射能災害による人権問題（差別、いじめ、偏見）である。被ばく地や汚染地から移住した人々が、出身地を隠すことがある。それは広島でも、チェルノブイリでも、福島でもそうだ。特に女性は結婚などで差別されることがある。汚染地から避難した子どもたちは、学校でのいじめに遭う。そして登校拒否や転居（転校）という事態になる。福島第一原発事故後の女子高校生たちは、家ではあまり原発の話をしてはいけないとされていて、学校でこんな会話をしているという。「私たちは国から見棄てられたんだ」「もう結婚もできないし、子どもも産めない」「だから自分たちはどうなってもいいんだ」「私たちは相手にされていないんだから、何をしてもかまわない」。こういうことが日本で起こっていることを忘れないでもらいたい。

福島第一原発事故後の長期的課題を四つ挙げる。これらはトークショーで話題になるだろう。

1) 健康への影響：甲状腺検診の縮小化、周産期異常（未熟児、先天性異常など）、持続的低線量被曝。これらはチェルノブイリの現状を参考にするしかない。チェルノブイリは低線量被曝の影響が確認されている。

2) 環境への影響：未除染エリア（山林）の生態系異常の推移。チェルノブイリは大平原と森林地帯だったが、福島の山林は除染できない。長野でも山菜から放射性セシウムが出ている。チェルノブイリでも福島でも稲の染色体異常や鳥の腫瘍などが確認されている。動物には畸形も生まれている。

3) 原発処理水の海洋放出：トリチウムは本当に心配ないのか。放射性の水素をプランクトンが食べ、魚がそれを食べ、魚を人間が食べることを通じて内部被ばくに至る可能性がある。

4) 廃炉作業の行方：最難関のデブリ（溶融核燃料）の取り出しは可能か。人

間は無理だし、ロボットも壊れてしまう。小出裕章氏によれば取り出しは不可能なので石棺にするしかないとのこと。廃炉作業は順調に行っても40年かかるが、きちんとできるのか。

終わりに、私の小さなつぶやきを。チェルノブイリ原発事故による人の健康や生活環境などへの影響は、事故後36年経過した今なお収束したとは言い難く、引き続き長期にわたる注意深い経過観察が不可欠である。福島事故はわずか11年が経過したにすぎない。チェルノブイリ事故の汚染地の現状を教訓にして、残念ながら国の対応に期待が持てない以上、国民一人ひとりが放射能災害にもっと関心を強め、たとえ時間がかかろうとも、子どもたちの未来を守るため、この国難に立ち向かっていくことが、私たち大人の責務である。チェルノブイリの現状は、福島の25年後の姿ではないか。

第2部 トークショー

1. なぜチェルノブイリに行ったのか

吉永：私は菅谷先生が出演されたドキュメンタリー番組『プロジェクトX 挑戦者たち チェルノブイリの傷 奇跡のメス』を授業で15年くらい見続けています。というのも、チェルノブイリ原発事故が起こった1986年はだいぶ昔の話であり、私自身も当時は小学生でリアルタイムの記憶があまりなく、実感をもって学生に伝えることが難しいので、ドキュメンタリーによって少しでも事故をリアルに捉えてもらいたいと思ったからです。視聴後の受講者のリアクションペーパーを見ると、菅谷先生のベラルーシでの献身的な医療支援活動の様子に関心が集まっていることがわかりました。そこでまずは、先生のベラルーシでの医療支援活動の話題から始めたいと思います。

金光：先ほど「献身的な医療支援活動」という話がありましたが、先生のご著書を読むと、「献身的」という描かれ方に拒否が示されており、なぜ関わるようになったかを先生のお言葉をお借りすると、先生の「人生の再構築」ですとか、

「人生のテーマを見つける旅」、はたまた、お母さまが昔見られた占いの予告ですとか、いろいろな要素が、先生が現地に行かれた理由として著作のなかで書かれています。今日のご講演でも、問題を把握していくなかで、「皆の力を合わせて」というお言葉が随所に出ていました。問題が存在していることはわかっているのですが、その解決に向けて一歩を踏み出そうとしたときに、そういった行動をとれる人はとても少ないのではないかと思います。そのなかで先生がいかなる思いで現地に行かれたのかということをお伺いするのは、我々が力を合わせて行動をとる際の一つのヒントになるのではないかと思いますので、最初にお伺いいたします。

菅谷：今日は私が裸にされるということだと思いますが、こういう場で少しリラックスして今のご質問にお答えします。実は私自身、そんな大それたことをしたわけではありませぬし、私がしたことは正直言って、大したことではないと思っていますのです。

では私自身はどうしてチェルノブイリに関わったかというのと、金光先生が今紹介された通りでして、すべては母の占いから始まったわけです。私は七人兄弟の末っ子ですが、最後の子どもで忍び難いと思ったのか、母が占い師に見てもらったのです。そうしましたら、占い師が「お母さん、たいへん残念だけれども、この子は43歳で死にますよ」と言うのです。そういう卦が出たのです。しかしその後、母は一度もそのことを言いませんでした。私は全然知らなかった。そして、母の臨終の席で叔母が言いました。「実は姉さんはお前のことを心配していた。43歳で死ぬという占いが非常に気になっていた」。私はそれを聞いたときに、ちょうど医学部の6年生に入る前でした。西洋医学をやっていたから、「そんな占いなんて、易なんて」と一笑に付したのを今でも覚えています。私は卒業したらどうしようかと、そちらのほうに心を向けて、その占いについては一切気にしないでいたのです。

そして私は医療者として、患者さんから「あの医者に診てもらってよかった」と言われる臨床医になりたかったのです。そこで私は東京に出ました。そのとき聖路加病院に行きまして、臨床医の神様のような日野原先生、医療者でありなが

ら人格的に尊敬できる先生から教をいただきまして、「患者中心の医療」を学び、「医者のプロフェッショナルになりなさい、本物の医者になりなさい」と言われたのです。

3年間のレジデントが終わり、私は大学病院に戻りました。それがまずかったのです。大学病院というのは、地方の大学病院でも医療の最後の砦になりますから、教室に入りますと、研究と学生の指導と、臨床ですね。最初のころはそのつもりで聖路加病院での教を守りながらやってきたのですが、ああいう大きな組織になりますと、ヒエラルキーが大変なのです。そういうなかで生き延びていかなければならないということで、それなりに勉強させてもらって、環境としては悪くなかったのです。そのなかで時おり、「こんな夜中まで研究していいのか」、「本当は臨床医になりたいのにこんなことをやっているといいのか」という疑問がわいたのですが、それを考えていると次の学会のテーマに取り掛かれなくなるのですから、自分でそれを押しつぶして過ごしていました。

そしてバカにしていた43歳が近づいてきました。43歳のとき、海外の学会に行きまして、虚無感に浸りながら、帰りの飛行機のなかで「この飛行機が落ちれば確実に死ぬな」と思ったのです。そのとき私は「本当に目指していた医療者の仕事を今しているのか」と自問自答したのです。患者さんから「あの医者に診てもらってよかった」と言われる医療者になっているのかと考えたら、NOの答が出ましたね。飛行機は無事に成田に着いたのですが、そこから私は、「どうせ死ぬなら納得して死にたい」と思ったのです。43歳で死ぬと決まっているのなら、納得して死にたいと思ったものですから、では何をするかというと、新しいことをするのは難しいですから、今の自分が持っているものを活かす場所はないかと探していたところ、偶然、チェルノブイリにぶち当たったのです。

事故があったことはもちろん知っていましたが、その後の状況はよく知らなかったのです。偶然テレビを見たときに、子どもの甲状腺がんが非常に増えているのだということで、日本のグループが出かけて行って、帰ってきたところのインタビューが出てました。なんとそのNGOは松本市に拠点を置いていることがわかりました。皆さんもご存じの鎌田實さんたちがやっていたNGOが松本市にあったのです。自分が持っている甲状腺がんの知識や技術をそこに少しでも使っ

てもらって死ぬるのなら本望だと思い、すぐに電話を入れました。向こうからは、甲状腺がんの専門医はなかなかいないので、ぜひ入ってほしいと言われました。それで私は1991年に初めてチェルノブイリに出かけたのです。

最初の5年間は大学に許可をもらいながら子どもの甲状腺がんの検診を行っていました。そのうちに手術を受けた子どもの傷を見て、向こうのドクターを日本で指導するよりも、私が現地に行って、医療状況が十分でないところでも自分の技術を活かそうと思ったのです。あくまでも向こうの方々の背中に回って支えるというスタンスで行ったのですが、向こうの医療技術が遅れているということもあり、総長さんの意向もあって直接お手伝いしたということです。ボランティアで海外に行ったとよく言われるのですが、むしろ自分自身の生き方を変えたいということがあり、大学を辞めて退職金を使って向こうで仕事をしてきたということです。

金光：ありがとうございました。限りある人生のなかで、ということが発端にあり、そこで先生は偶然にそうした問題と出会った、ということでしたが、そうした邂逅のなかで専門領域を活かされたというのは、私たちも学ぶことがあると思えました。つまり我々もどこかで偶然に出会う場面があるかもしれないのですが、その偶然の出会いを大切にして自分のできることを探していくのが大切だと、先生のお言葉を解釈いたしました。

2. 子どもの生存権と情報公開のありかた

金光：もう一点、先生のご講演で、チェルノブイリの子どもたちの苦痛という話がありました。これは福島にも当然関わる話だと思いますが、この「苦痛」という点について質問いたします。先生が2001年に書かれた『ぼくとチェルノブイリの子どもたちの5年間』という本を、小学校5年生になる自分の子どもと一緒に読んだのですが、子どもの視点からすると、この子どもたちはその後どうなったのかが気になったようで、本の最後に再会の場面が出てきてほっとしたと言っていました。2001年から20年経っていますので、先生が2016年に訪問した時にそうした子どもたちがどういう状況にあるのか、もしご存じでしたら伺いたく思います。

それを発展させた質問として、子どもたちの生きる権利、生存権の侵害であるというお話について、私は痛烈に考えさせられました。先生も言及された水俣病然り、こうしたものは弱者にしわ寄せがいくという構造が現れていて、子どもたちは逃げたくても自力では逃げられないし、食べるものも自分では選べない、教育も選べないかもしれない、という点で弱者といえると思います。そのときに情報提供のあり方が問題になります。当時のベラルーシでのチェルノブイリに関する情報の与えられ方と、福島における情報の与えられ方とで、何か違いがあるとお感じになる点があれば、お聞かせください。それをふまえて、今後の福島ではチェルノブイリと同じ道をたどるかもしれないので、どういう情報提供を福島の子どもたちに与えるべきなのかについてもお話を伺えればと思います。

菅谷：この事故が起こったのは旧ソビエト連邦の時代ですから、報道管制が当然のことながらありました。最初に事故があったときにはモスクワからの情報が伏せられていました。ごく小さな事故があったと新聞の下のほうに載せられていたくらいで、旧ソ連の人たちが大きな事故であることを知ったのはヨーロッパ経由でした。情報が伏せられていた結果、被害がひどくなりました。甲状腺がんについては、あのときに早く、ミルクを飲ませてはいけないとか、キノコや野イチゴ、葉物などを食べさせてはいけないとか、肉類を食べてはいけないとかを出しておけばよかったのですが、そうしなかった結果、あれだけの甲状腺がんが出てしまったのです。特に乳幼児はミルクを飲んでいますが、そのミルクのもとになるヤギやウシは汚染された餌を食べていますから、特に当初は放射性ヨウ素が入っていて、それが甲状腺がんの原因になりました。

もう一つ大事なことがあります。4月26日に事故が起こり、そのあとの5月1日はメーデーなのです。ソ連にとって大事なのはメーデーで、もし大爆発が起こったと言ってしまったら、国民が大騒ぎになってメーデーがきちんとできないということがあり、これも情報を伏せた大きな要因だったようです。向こうで聞いた話では、「メーデーは命より優先する」というのです。

一方で福島はどうかというと、福島第一原発事故が起こったとき、皆テレビで見っていましたよね。日本の場合には、乳幼児に対してはミルクを飲ませてはいけ

ないとか、魚や野菜を摂ってはいけないということをすぐに言ったものですから、乳幼児の甲状腺がんは比較的少ないのです。むしろ中学生や高校生の方が、かかる率が高いのです。なぜかという、あるとき地震や事故によって、水道水が出なくなったのです。そこで給水車から水をもらうために子どもたちが外に出たのです。そこで被ばくした可能性があります。このように日本は当初は比較的良かったのです。そしてマスコミも書きました。

しかし今11年経って、近年は福島の事故はほとんど報道されませんよね。福島以外の新聞は書かなくなってしまった。この点について国から報道に規制がかかっていないかどうかは気にしているところです。今後どうするかについては、福島の廃炉やトリチウム水の問題も含めて、もっと情報をオープンにしているいろいろな意見を出してもらって、国民が判断する方向にもっていかないと、これから様々な問題が出てくるのではないかと考えております。

金光：ありがとうございました。今日の先生の講演のなかでも「風化」という話があり、また「難治性悪性反復性健忘症」という診断名があったことと関わる質問を参加者よりお受けしています。「私だけでなく、広島・長崎の原爆は歴史上の事件、単なる知識として昇華してしまっている人は多くいると思います。だからこそ私は3.11が起きたことを風化させたくありません。風化させないようにするためにできることはなんだと思いますか」。

菅谷：情報をどんどん出していかない限り、風化してしまいますよね。関心がある人は情報を取りにいけますが、そうでない人は与えられない限りは情報がないですよね。ただ、気になるのは、先ほどウクライナの話をしました。一方的なニュースだけを流して、それを鵜呑みにしてしまうことがありますので、客観性をもたせるには多方面からいろいろな情報を出して判断してもらうことが必要です。

金光：もう一つ質問をお受けしています。「ロシア、ウクライナ、ベラルーシの人を形容した言い方は、ベラルーシ人の意見のようでしたが、他国の人に聞いた

らもっと違うものになるのでは、と思いました。いかがでしょうか」。

菅谷：私はベラルーシにいたから、ベラルーシの人から性格を聞いたということであって、それ以外の国の人はたぶん違いがわからないから、一体として東スラブの人たちはこうだとなるかもしれません。

3. 放射性物質の生態系への影響

吉永：ご講演の最後にあった、生態系への影響という点について、改めてお尋ねします。チェルノブイリでは現在、人がいなくなったことによって、野生動物の王国になっているという話があります。そのようななかで、チェルノブイリにおいて動植物への放射性物質の影響は見つかっているのでしょうか。

菅谷：チェルノブイリ原発事故から36年経った今、汚染地の状況がどうかといえば、私は情報を持っておりませんが、原発から30キロゾーンは森林地帯で当時のままで、あの地域にはいろいろな生きものがいますが、たぶん相当な問題が起こっているのではないかと思います。多くの研究者たちが生態系の異常について報告していますから、たぶんあるでしょう。例えば遺伝子異常、染色体異常があれば、そこから思わぬものが出てくる可能性があります、これは見てきたわけではありませんので、はっきりとしたことは言えません。同じことを福島でも、農学や植物学の先生方が研究していますが、似ているのです。国が違って、放射性物質による生物への影響はあまり変わらないだろうと思います。

日本政府は福島原発事故は収まっていて、「アンダーコントロール」と言っていますが、本当にそうでしょうか。「居住禁止区域の一部に人が戻ってもいいですよ」と言ってもよいのか、と非常に気になっています。チェルノブイリの場合には絶対そのようなことはしません。生態系の異常の問題を考えると、当然、人間にも放射性物質の影響があります。

日本は「安全神話」のなかで原発が稼働していましたが、福島の事故で安全神話が崩壊しました。しかし、いちばん安全、安全と言っていた政府や学者がどう責任をとるのが話題にされていません。あれだけ安全というから、日本の皆さ

んは原発を受け入れてきたけれども、事故が起こってあれほどの被害があり、おそらくこれから様々な事態がもっと出てくると思いますが、そのときに政府や学者、あるいは官僚たちはどう責任を取るのか、これについては日本国民全体が真剣に考えるべきだと思います。

4. 保養について

金光：今お話しいただいた現場に近いところの質問を一ついただいています。「保養活動をしています、福島では『もう大丈夫、もう普通の生活に戻っているので、保養は必要無い』といいます。一方、保養に出たいという人もいますので、そう希望する方々がいるならと続けてきましたが、やはりやって行く方が良いでしょうね」。

菅谷：小中学生、あるいは幼稚園の子にとってみると、親の考えに従うしかないのですよね。正解は誰ももっていないのです。様子を見るしかないんですよ。チェルノブイリの状況を参考にするしかないのですが、日本政府の皆さんはなかなか動きません。というのは、認めたくないのです。福島がひどいと思いたくない。そのような感覚が先行しますから、細かい情報は伏せているというところがあると思います。情報を全部出せとは言いませんが、最低限の情報は出していかないといけない。

話を戻しまして、チェルノブイリは今でも保養をさせていますから、特に低濃度の汚染地域にいる子どもたちは免疫機能が落ちてしまう、また、そこで赤ちゃんを産んだ女性にも生殖系の問題が出てきている、子どもたちに先天異常が出ている、ということになると、「低線量被ばく」は実際には深刻なものなのですが、日本は大したことはないといっている先生もいます。ここが難しいところなのですが、それを科学的に証明することはできないのです。甲状腺がんは放射性ヨウ素によってできたと言うけれども、それは誰にも証明できないのです。ですから、他のエリアと比べて発生率が高いという疫学的な結果をもって、おそらく放射性物質の影響だろうと推測せざるをえないのです。

国際的に見ても、子どもたちは大人に比べて放射線の影響を受ける確率が3倍

から4倍高いわけですから、保養しておいた方がよいのです。お母さんたちが、後で悩むんです。自分の子どもに何か特殊な問題が起こったときには、お母さんたちは、「あのときに避難させればよかった」、「あのときに保養させればよかった」と一生悩むんです。これはチェルノブイリでもありました。「あのときキノコや野イチゴを食べさせなければよかった」ということがずっと尾を引いているんです。これは私自身が現地で見聞きしているものですから、お母さんたちにはこんなことは経験させたくないと思います。ですからできるだけ安全策をとっておいたほうがいいだろうと思っています。

5. 原子力発電をどう考えるか

金光：ありがとうございます。少なくともチェルノブイリでは今でも保養が行われているということでした。それでは最後の質問です。これは3人に答えてほしいとのことです。

「原子力発電について質問です。近年では再生可能エネルギーが注目されていますが、これらだけで電力を賄うのは難しいと思います。火力発電では温室効果ガスが出てしまうというデメリットがあります。原子力発電にも電力量が多い、再利用しやすいなどのメリット、放射能というデメリットがありますがこのメリットデメリットを踏まえた上で原子力発電をなくすべきだと思いますか？また、なくすべきだと言う場合、どのようにすれば原子力発電はなくなると思いますか？」

菅谷先生は先ほどから中立的な立場とおっしゃっていますので、同じようなお答えになるかと思いますが、私も立場を言うならば「中立的」と言います。ただし、そもそも原子力発電を技術と呼んでいいのか、という問いを発しています。というのは、この技術が暴走したときに我々人類は基本的に抑えることができないわけです。事故の後だけではなく。そもそも原子力を「アンダーコントロール」として扱えるのかどうか。さらには廃棄物の問題です。我々は出したごみについて何ができるのかと言うと、10万年影響が残る高レベル放射性廃棄物を我々は埋めておくことしかできないわけです。出したごみの処理のしかたもわからないものをテクノロジーと呼んでいいのでしょうか。私はそういう立場です。

吉永：ここでの「中立的」というのがよくわかりませんが、先入観を交えずにフラットに考えることを「中立的」と呼ぶならば、私も「中立的」です。エネルギーのベストミックス、つまり様々なエネルギーをどう組み合わせればよいのかという議論があります。その際、ベストミックスは、メリットやデメリットはあるけれども、重大な欠陥がないもの間で考えられるべきだと思うのです。原発には破局をもたらすような欠陥があるので、それをベストミックスに入れていいのは非常に疑問があります。太陽光にも火力にもデメリットはあります。しかし原発の場合のデメリットは質も異なり量も桁が違うので、それはベストミックスから外すべきだろう、というのが私の意見です。

菅谷：私はこれまで市長という「公人」の立場でありましたから、そのときには自分自身の意見を言うことが難しいことがありました。市民の皆さんにはいろいろな方がいらっしゃいますから、そこで私の発言が取り上げられると、炎上したり、いろいろなことが起こりますから、市長時代の16年間は、私の意見は差し控えさせていただいて、中立的な立場をとっていました。それから、私は決して皆さんを煽っているわけではないということです。事実だけは、私が見たことを話していますが、だから原発はダメだと言っているわけではないですよと言ってきました。

ただ私は日本に帰ってきて、申し上げたことが三つあります。一つは、もうこれ以上、新しい原発は作ってほしくないということです。現在あるものを、事故が起きないようにコントロールして、廃炉まで対応できるようにしてほしい。二つ目は、日本は再生可能エネルギーを推進する方向にお金をシフトしてほしい。三つ目は、ただ政府をお願いをするのではなくて、国民が節電をしてほしい。日本は電気を湯水のように使っていますよね。もっと電気を大事に使って、生活のコントロールを自分自身でもやろうではないかと。そうすれば再生可能エネルギーでやっていけるわけです。

お二人の先生が言われた通り、原子力発電を人類はコントロールできるのか、大変難しいのではないかと、というのが今の流れですよ。ですから、できれば徐々に原発依存をやめていく。というのは、ひとたび放射能汚染が起こったとき

に、山の汚染は除染できないんですよ。これが子孫にどういう影響を与えるのか。これは環境倫理の問題だと思います。また原発は安いというけれども、どんどん高くなりますよ。今福島にたくさん税金を使っているんです。これからまたさらに使うわけです。それから、本当に福島に人が戻るべきなのかということも真剣に考えなければならないことです。

吉永：本日はたいへん貴重なお話をありがとうございます。最初に菅谷先生のところに打ち合わせでお伺いしたときに、「環境倫理というのは人権の問題ですよね」と先生がおっしゃったのです。環境倫理は一般に生態系などの人間以外のものを重視する立場だと言われますが、しかし環境倫理のなかには人権を尊重する議論があります。そこを先生は見事に突かれたと思いました。今日も生存権の話がありました。原発問題はよく「リスク」の観点から語られますが、「人権」の観点から考えなければいけないことを改めて学びました。それから先生のご著書にある「難治性悪性反復性健忘症」と、先ほど先生がおっしゃった「安全神話」、この二つが原発に関する日本の一番深刻な問題だと改めて思いました。

菅谷：最後に一言だけ、学生君にお礼を申し上げたいと思います。今、大学の学長という立場ですが、私自身、若者に非常に期待をかけております。ぜひ次代になう皆さんが社会の問題、戦争と平和の問題、環境の問題など、さらに関心を深めていただきたいと思います。若者に何かメッセージはないかという話がありましたが、私は「行動を起こさなければ何も生まれない」。恩師の日野原先生が言っていたのは、「考えているというのは、何もしないことだよ」。今の日本の若者は内向き志向ですから、どうしても一歩踏み出せないんですね。そうではなく、「失敗してもいいんだよ」と私はいつも言うのです。そして踏み出さない限りは結果が出てこないのです。失敗しても、そのあとで周りが助けてくれたり、いいヒントを得ることがあるわけです。そういう意味で、今日こういう人間がいるということを知ってもらって、君たちがさらに大きく成長して、日本を引っ張ってくれたらとてもうれしく思います。本当に今日はありがとうございます。

(付録) 追加質問と回答

質問 1: ベラルーシで医療支援活動を行うにあたり、言葉でのコミュニケーションに不自由はなかったのでしょうか。

菅谷: ロシア語はわかりませんでしたが、ドクターたちが集まって話しているのを聞いているうちに、何を話しているのかがわかるようになりました。しかし私自身はロシア語を話せませんので、英語がわかる人に、言いたいことは英語で話していました。ただ、手術中に緊急に用件を伝えたいときに、英語がわかる人がいないときには困りました。

質問 2: 甲状腺がんについては、日本では、過剰診断論が跋扈しています。人権ということが間違っただけに使われているように感じます。そのことについてどう思われるかお聞きしたいです。

菅谷: 誠に申し訳ありませんが、文面だけからは、「過剰診断論」と「人権」との関係が十分理解できませんが、「過剰診断」による小児甲状腺がんの超音波検査縮小の動きに関して、私の考えを述べさせていただきます。

超音波検査縮小を提唱したある研究者の甲状腺がん発症説は、あくまでも個人的な仮説であり、私の知る限り、この考えを支持する甲状腺専門医は極めて少ないと思います。

そもそも福島県において、なぜ小児に対してこのような集団的超音波検査が必要とされるかについて、深く考えていただきたいと思います。福島第一原発で事故が発生したことによって、放射性物質による環境汚染の可能性がある地域における小児甲状腺への影響の有無について、長期にわたり経過観察を継続すべき疫学調査としての必要性があるために実施するものであります。これは原発事故による健康への影響の有無に関する記録を残す意味においても国家として不可欠な調査であります。

質問3：チェルノブイリ周辺の、特にベラルーシでは何か風化させない取り組みがあるのででしょうか。また、菅谷先生が関わったベラルーシ国民の方々は事故をどのように振り返っているのでしょうか。

菅谷：風化させない一つの理由として、原発事故に関する政府の認識も含め、国家体制の相違が関係していると考えられます。ベラルーシでは、国をあげて放射能汚染地域や被災者への支援が広く実施されており、日本とは大きな違いがあります。またベラルーシ国民は、この事故による将来の不安を常に抱えており、併せて政府が原発を建設することに反対している人々も多数いるものと推測されます。

質問4：徐々に世間から忘れられていく被災者の心のケアをしつつ、人々の震災や原発事故に対する偏見をなくす活動がしたいのですが、これから私は具体的に何をしていけば良いのでしょうか。

菅谷：人権的な立場から、被災された方々への深い配慮に対し、心より感謝を申しあげます。いじめや偏見など、あってはならない事象ですが、現実問題として生じていることに対し、私たちはこの事態を阻止すべく努めていくことが不可欠であります。その手段としては、個人として行動することよりも、集団的（組織的）な形により、時間をかけ、丁寧な話し合いと相互理解を深める努力によって良い方向に導いてくださることを強く願っています。

*本報告の作成にあたり、菅谷氏には内容確認の労をとっていただき、また追加の質問にも丁寧にお答えいただきました。感謝申し上げます。当日のトニカンの運営に関しては、武貞稔彦学部長、辻英史教授会主任、金光秀和教授会副主任、ならびに学生アルバイトの皆さんから多大な助力を得ました。当日参加された先生方にも、この場を借りて御礼申し上げます。皆さんありがとうございました。